

## 「高橋新太郎文庫」の取り組み

収集家にとって意味あるものが、第三者にとつては無意味な、

ときに存在それ自体がコストとなる場合がある。しかし、収集家にとつての不幸は、収集家である彼が考える「意味」に無知な人間たちが、「存在それ自体がコスト」と認定することではない。収集家は、収集の時点ですでに、それが「第三者にとつては無意味な、ときに存在それ自体がコスト」と認定されるであろうことに、ある程度の覚悟と決意は、ある。収集家にとつての真の不幸は、たとえ彼の収集の意味には無知であっても、彼を愛するが故に彼が慈しんだものを、「存在それ自体がコスト」と言い切れぬまま持て余す姿を知ることだろう。

我々が愛する故・高橋新太郎は、心優しい人だから、彼の収集の「意味」に無知な我々が、段ボール箱で約二千五百箱、推定約七万冊の書籍という彼の収集物の前で悄然とする姿を見れば、「もういいよ。捨ててしまいなさい」と言うだろう。けれども我々の不幸は、高橋新太郎は故人となつてしまい、もう彼から直接に、「捨ててしまいなさい」と言ってもらえないところにある。あるいはそれが、心優しいふりをして生きた高橋新

太郎の「作戦」だったかもしれない。

「高橋新太郎文庫」を担う我々の作業は、愛する高橋新太郎から、もう絶対に「捨ててしまいなさい」と言ってもらうことはない膨大な「蔵書」を引き受け、悄然とし、けれども意地になって、「持て余してはいません!」と言い切るための取り組みなのである。

そして、「なのである」と紋切り型に宣言せざるを得ないほどに、実は、持て余しているのである。

\*

「高橋新太郎文庫」はホームページ上の文庫である。「日本近代文学とその時代の研究に資することを目的に、国文学者・高橋新太郎（学習院女子大学名誉教授・〇三年一月十一日没）の業績と蔵書、収集資料目録をweb上に記録する」ために運営している。

発端は、新太郎先生（私は、そう呼んでいた）の死去により学習院女子大個人研究室（書棚ばかりでなく机、椅子、床にもうず高く本が積まれ、もはや研究室としての用をなさなくなつてい

なかがわじゅんいち  
中川 順一  
（高橋新太郎文庫事務局）